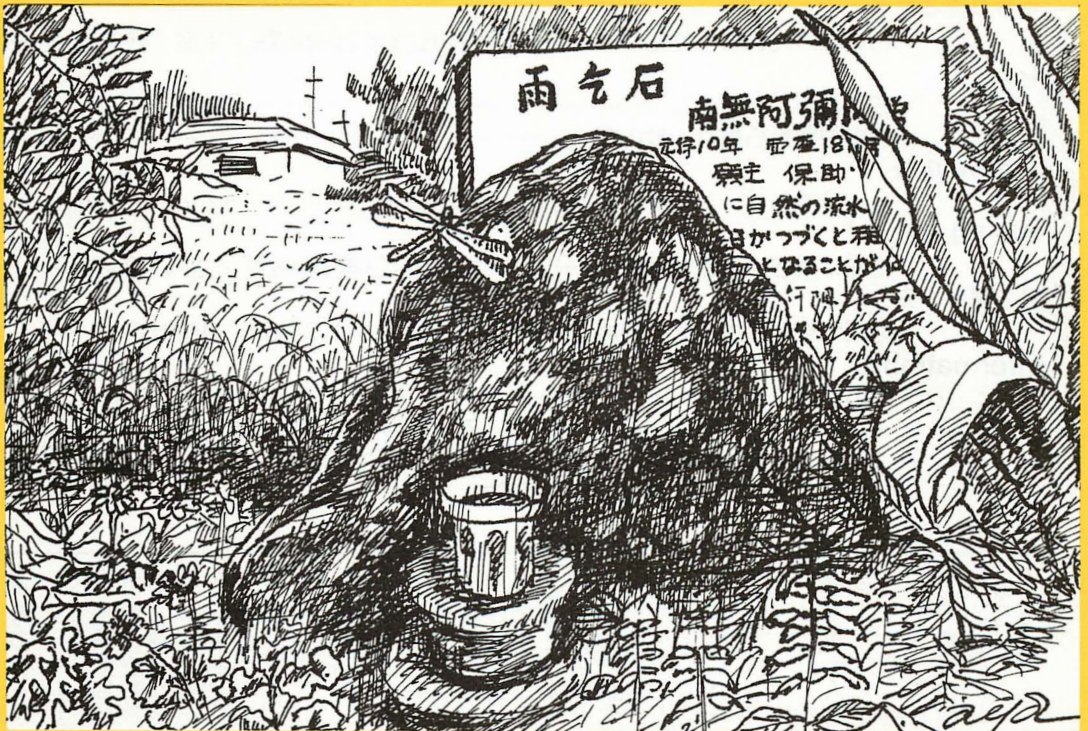


舞 とうん

VOL 42



丹原町 雨乞石

特 地域を担う人材育成 -まちづくり塾から- 集

『心地よい汗』

- 阿部ちゃんと玉ちゃんと鱈ちゃんと
- 祭りを創る！
- 環境スクールと町づくり
- 感動を分かち合うために
- 人生意気に感ず

お正月の餅……………(福)愛媛県社会福祉協議会長/門田 圭三 …………… 1

特 『地域を担う人材育成 一まちづくり塾から』 集

一心地よい汗

- 阿部ちゃんと玉ちゃんと鱈ちゃんと……………新居浜市/長井 秀旗…………… 2
- 祭りを創る!……………今治市/青山 洋士…………… 4
- 環境スクールと町づくり……………小田町/岡田 行雄…………… 6
- 感動を分かち合うために……………宇和島市/森田 孝嗣…………… 8
- 人生意気に感ず……………内海村/那須 芳人…………… 10

論談一まちづくり

過疎化の波を越えて……………福井県立大学専任講師/岡崎 昌之…………… 12
放送大学客員教授

キラリ光るまち

日之影の光創造・発信……………宮崎県日之影町企画開発課長/甲斐 好夫…………… 14

レポート

杉によるジゲおこし…………… 16

雲の隙間から見た、秋山郷…………… 17

ふれあい広場

リレーでちょっとーク(川之江市・一本松町から)…………… 18

地域を生きる

地域に根ざした教育活動……………松山市立日浦中学校長/宮内 正民…………… 20

風の便りから

地域づくりのペースを求めて一管見スイスを歩いた2週間/見想録Ⅱ…………… 22

Information

媛のくにフラッシュ…………… 24

〈川之江市・吉海町・重信町・双海町・内子町・野村町・内海村〉

「まちづくり草の根文化講演会」の開催について…………… 27

地域づくりビデオ(貸出し)のご案内

特集「地域を担う人材育成

一まちづくり塾から」

今号のテーマ

一心地よい汗

地域活性化への取り組みは、地域の個性や特性を軸として、様々な模索と懸命な努力が続けられている。それぞれの地域には、個々の歴史・産物・文化等の資源があり、それを活かして地域活性化に結び付けていくのは、私たち「人」であり、「まちづくり」において最も重要なキーワードは、「ひとづくり」すなわち人材育成である。

人材育成を目的とした取り組みの中でも、最近特に『まちづくり塾』活動が注目されている。塾活動のあり方として、楽しみながらお互いが学び合い、自らを高め、「自分づくり」をすることを大切にし、更に行動することによって、塾自体の活動を地域への広がりをもった活動へ展開し、地域の活性化に結び付けていくことが、強く求められてきたのではないだろうか。また、このような塾活動が、今、住民が主体的にまちづくりに関わるための方策として、注目を浴びている大きな理由ではないだろうか。

そこで、特集のメインテーマ『地域を担う人材育成一まちづくり塾から』第二集として、今号ではサブテーマを『心地よい汗』とし、各地域で、まず自分たちで出来ることから、地域に根ざした活動を実践し、「心地よい汗」を流しているまちづくりグループを視点を編集いたしました。

表紙の言葉

昨夏は雨ばかりとほやき、今年は水不足。水の大切さが、十分身に染みしました。

丹原の生木地蔵を見たり、境内に雨乞石があり、雨がほしいと願掛けますと、松山に着くまでに三回にわか雨。

でも、松山には届きませんでした。

柳原 あや子



丹原町 雨乞石

お正月の餅

社会福祉法人
愛媛県社会福祉協議会

会長
門田圭三



物心づいて初めて福祉について
教えられたのは、小学校の頃、愛
媛慈恵会の存在である。当時は孤
児院という呼ばれ方をしていた。
仲田家の慈善事業として、幼い頭
にも強く印象づけられていた。
その頃年末にはどの家でも、お
正月用にお餅をついたものだ。そ
のお餅のいくつかを学校に持ち寄

って、慈恵会に届けるのが、私の
村の習わしになっていった。正月が
来ても、家もなく、親もない子供
はどんなに寂しいことか、と子供
心に同情すると共に、そうした慈
善行為がいかに尊いものであるか
を説く先生の教えが、心にしみ通
る思いであった。立派な実物教育
であった。

年末のお餅の持ち寄りの精神が、
歳末の赤い羽根募金となり、或い
はテレビの二十四時間チャリティ
放送など、形を変えて展開され
ているのであるが、若干形骸化し
ているように思うが如何であらう
か。

戦争を一つの境として、それま
での「慈善」「施し」であった福
祉の考え方が変わってきたのでは
なからうか。

太平洋戦争では数えきれない犠
牲者が出た。戦災孤児、戦争未亡
人、傷病軍人ら戦争被害者が巷に
あふれた。それらの人々に対する
救済活動はもはや慈善ではなく、
「社会的責任」となってきた。「施
し」ではなく、政治責任の問題と

もなったのである。

戦後の経済復興に伴って、人口
の都市集中と農村の過疎化が進ん
だ。「家」の制度が改まったこと
もあわせて、家族の都市化、核化
が顕著になった。一方で食糧事情
の改善と医療の普及によって、世
界でも珍しいスピードで長寿社会
を迎えることになった。しかし、
お年寄りの面倒をみるかつての大
家族制度は既に崩壊している。

その反面生まれてくる子供の数
は少なく、少子時代となっている。
高齢者保健福祉推進十ヵ年戦略
Ⅱゴールドプランや、子育て支援
推進総合計画Ⅱエンゼルプランな
どが、次々と提唱され、大きな政
治課題となってきたのは、こ
のような歴史的背景に基づくもの
であろう。

恵まれない人達への「施し」の
福祉の時代から、弱者、障害者、
高齢者、子供……を扶け、目配り
しながら、豊かで幸せな社会づく
りを目指す福祉の時代へ。後ろ向
きの福祉から、前向きな未来建設
型の福祉へと進みつつある。

しかしその原点は、親のない孤
児に一片の餅を、という温かい心
ではなからうか。

今多くの人達が、民生活動に、
介護活動に、ホームヘルパーとし
て、施設従事者として、単なる職
業の枠を超えて誠心誠意働いて下
さっている。その方達の活動の原
点は、恵まれない人達にも幸せな
生活をという思いやりの心であら
う。

このような人達の支えによって、
明るいまちづくりの光明の灯がと
もし続けられてゆく。勤務時間以
外も、ボランティアとして、福祉
に携って下さっている方々も多い。
この場を借りて厚くお礼を申し上
げたい。



阿部ちゃんと玉ちゃんと 鱒ちゃんと

新居浜市生活文化若者塾
長井 秀旗



三代目になる事務局を引き受け
た時、私は塾活動をカッコよくス
マートにしようと考えていました。
ところが、いざ活動を始めてみ
れば、正直なところ、私はなんと
も得体の知れぬ不安感と摩訶不思議



探訪ツアー 平成5.11.14

塾活動は、あくまで自発性に基
づいた活動であり、自分で決め、
自分で活動し、そしてその結果が
自分に返ってきます。新しい活動
をすることで、外部からのさまざま
まな反応や評価を受けるわけです
が、私にとって問題となるのは、
善い悪いといった外部の評価より

議な充実感と
の、一見矛盾
するこの二つ
の間をいつも
行き来してい
る、そんな毎
日を送るよう
になりました。

も、むしろ活動の結果が、再び自
分のところに返ってきて、私を悩
ませるといふことなのです。その
時には、もうこれ以上はないとい
うギリギリのところまで詰めて考
えたのだけれども、どうしても不
安感から逃れることができない。
もし仮に、塾活動が私の仕事であ
るならば、私は上司の命令通りに
動けばいいわけで、活動の結果に
ついてこんなに悩まなくてもいい
かも知れません。しかし、自分で
決めたことですから誰も責めるわ
けにはいけません。結局のところは
自分を頼る以外はない。こうして、
自分でそう決めて活動したことが、
自分自身を縛ることになり、もう
一度じっくり考えなくてはならな
いという堂々めぐりの状況に陥っ
てしまっているわけなのです。
そして、その不安は活動すれば
するほどに大きくなっていくので
す。



シバザクラ植栽 平成6.3.13

のあとの言いようもない充実感だ
と言えます。それは、まさに「心
地よい汗」と言えるものかも知れ
ません。一口に充実感と言っても
いろいろな形があるわけで、単に
自己満足に終わるものもあれば、
ほんの小さな活動から、思わぬと
ころで新しい発見をすることもあ
ります。誰かのための活動が、結
局のところ巡り巡って自分のとこ
ろへ返ってくるということもあり
ます。また、この充実感には、自分
には仲間がいるなあ、自分は誰か
に助けられているなあという、し
みじみとしたものもあります。
そして何より不思議なことは、

ひとつの活動が終わった後、同じ思いをした者がまた再び集まってきて、次なる「不安の素」に早速夢中になっているということです。こんな調子で、塾活動にかかわった時から、私の中では終わることのない不安感と充実感とが錯綜し続けているのです。

話は変わりますが、質の高い生活文化都市づくりを標榜している塾としては、やはり文化について考えなくてはと思っていますのですが、私が今一番感銘を受けているのは、京都大学教授の池上惇先生の著書のなかの、「文化とは相互の個性から学び合う雰囲気高めることである」という定義であります。文化都市づくりを標榜する以前に、塾が文化的でなければならぬのは、むしろ必須条件とも言えるべきもので、今さら何をと笑われるかもしれませんが、池上先生の言葉を借りるならば、塾を「個性的な状況がお互いに受け入れられている状態」に保ち続けていくことが極めて重要なことと思

うのであります。

「地域づくりは人づくり」とよく言われますが、私は、塾の活動の中で、塾生に絶えず新しい刺激とある種の緊張感をもたせることをとくに大切に感じています。こうしたボランティア活動は、ある面では楽しくなければ長続きはしれないと思うのですが、反面、ともすれば意見が偏り、また排他的な内輪だけの組織になりがちなのが欠点でもあります。そうならないためにも塾の組織を硬直させず、できるだけやわらかいものにしていく必要があります。そうすることで自分と違った意見、違った考



インターナショナルパーティー 平成6.2.6

後列いちばん左が長井さん



留学生歓迎会 平成6.5.8

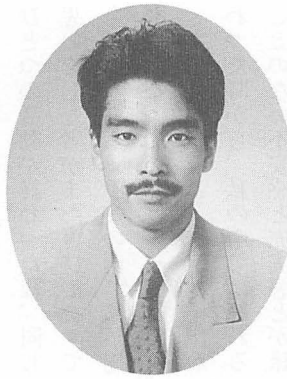
え方に絶えず触れ、自分の目、自分の感性を磨いていく。そして、磨かれた個性と個性との強烈なぶつかり合いの中から、ほんものと言える新しい何かを生み出していく。そうした経験を通じることで私は塾生が成長していくものと考えています。塾活動は、この様な経験をすることが出来る場であると思うのです。

私が今、最も愛すべき塾のメンバーに阿部ちゃんと玉ちゃんと鱈ちゃんの三人がいます。実のところ私は、この三人にはよく怒られている（怒ると書くとおバーに

聞こえるが、実際はそこまではいいかないであろう）のですが、何もそこまで言わなくても、時には苦笑いをしつつも、内心では、もしこの三人に怒られなくなった時には、塾を引退しなければならぬいだらうと思っています。決して一方通行ではなく、人から何かを与えられるかわりに、その人にも何かを与えられる、私は塾のためにも、また自分のためにも、そういう人間関係をこれからもずっと続けていきたいと考えています。むしろそのための努力は惜しまないつもりでいますが……。



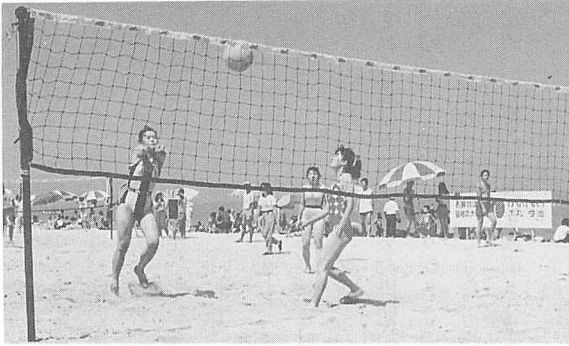
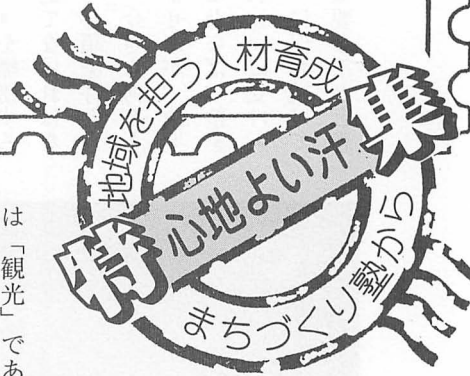
塾合宿 銅山の里自然の家 平成6.5.28~5.29



祭りを創る!

社団法人 今治青年会議所
広報渉外委員会

副委員長 青山 洋士



“ホッと今治”でのビーチバレーボール大会

我々の故郷、今治地域の大きな財産、それは「海」です。そして、その財産を他へアピールする手段（産業）は「観光」であり、「レクリエーション」です。

この大きな「海・観光・レクリエーション」というテーマのもとに、我々、社団法人今治青年会議



所が、白砂青松の唐子浜を舞台に、「ホッと今治」というイベントに取り組み始めたのは、今から六年前の一九八八年でした。

当初は、この海と、そしてこの地域をできるだけ多くの方に知って欲しい。また、この地域の人々にもう一度、この砂浜の良さを再認識してもらいたい。そんな思いから、ジェットスキー、ビーチバレー、ボードセーリング等のスポーツイベントや、ふるさと物産展、子供達にも、遊びながら参加して

もらうために、本四架橋や、歴史的財産としての村上水軍をテーマにした海上の手づくりトリムランドなど、海の砂浜を舞台に様々な事業を展開し多くの方々の賛同を得ることができました。

それから、毎年、回を重ねる中で、事業内容にも様々な変化が生まれてきました。我々、青年会議所の単独の事業である「ホッと今治」だけではなく、行政の方々の呼びかけによる「瀬戸内海音楽祭」等の一大イベントと協力して、とにかく夏の今治を盛り上げていくという気運が高まり多くの人々を巻き込んでいきました。

そして、この数年来、新たなステップとして、本当の意味での「市民総参加の夏の祭り」を創ろうという声が、我々、青年会議所だけでなく、いろいろな所から聞かれるようになってきました。

しかし、一言で「祭り」を創るといっても、実際にどうすれば良いのか?とに、いろいろな立場から考えていこうと、これまで、夏と一緒にイベントを行なってきた

た様々な団体（行政・商工会議所・ボランティア団体等々）の方々と「夏まつり準備会」を発足させました。その中で、まず今治の祭りの歴史、そして、他の地域の成功例等を勉強することから始めようという、小さな輪ができました。しかし、いつまでも机上の空論では「事」は起こりません。とにかく実際に行動を起こそうと、新しく曲を作り、踊りを作り、昨年はプレとして、そして今年第一回目の夏祭りを「バリ祭」と名付けて開催することができました。そして何人か何十人かの「キーパーソン」が生まれました。

「キーパーソン」とはまちづくりにおいて、それぞれの目的を持った集団の核になれる人達を言います。一つひとつは小さなものであってもその核が新しい核を生み、やがて大きな力となっていきます。そして、この「キーパーソン」たるべき人達が、もつともつとたくさんこの今治にはいるはずだと思います。

自分は、「こうすれば今治はもつ

と楽しい街になると思う」「こんなイベントがあったらいいのに」など、思っただけでも、一人では、また、小さな集まりではなかなか思う様にならない。というような人達の接点として、祭りは非常に良い手段だと思います。そして、この接点を多くするためにも、「バリ祭」を長く続けることが一番大切だと思います。

そうする中で、今、この街には何が足りないのか、何が必要なのか。そして、自分達の誇れる物は



第1回「バリ祭」での1コマ



市町村や、地域で、祭りがあり、イベントがあり、そしてキーパーソンがいます。この人達と交流することによって、また一つ、輪が広がっていくのではないのでしょうか。

私達、今治JCMも、もうすぐ三十周年を迎えます。長い歴史の中で出会った地域のキーパーソンと、より一層の交流を深め、また、新たなネットワークを形成することによって、我々メンバーが一人でも多く、この地域の未来を本気で考える核になれるよう、活動を続けていきたいと思えます。

何なのかを考えていく上でも、多くの人達との交流を重ねることで、同じ街に住む者が同じテーマで自然体で語り合える、そんなまちづくり運動ができるのではないかと思います。

数年後には、今治市と尾道市を結ぶ橋が架かります。それに伴い、この地域の生活圏も広がっていきます。今、今治地域で考えていくとするとまちづくり運動を、西瀬戸地域全体で考えなければならぬ時期に来ていると思えます。各





環境スクールと町づくり

小田町
『ODAの木プロジェクト』
推進委員 岡田 行雄



色々なプログラムにより体験学習

取り上げられているように、地球規模で環境問題が注目されている。私達は木に親しみ、自然の中に入り込むことによって、その素晴らしさを肌で感じ、体験することによって、自然環境により多くの方が関心、そして理解を深めていただくために環境部会をスタートさせた。

ODAの木プロジェクトの環境部会ができて二年になる。
現在、テレビや新聞・雑誌等で数多く



環境教育研修会 (小田深山)

のトレーナーとしての指導を受け感動すると共に、これなら私達の町でもできるのではないか。この清里地区より自然豊かな小田深山が私達の町にはある。この小田深山の恵まれた自然に、子供達もそして大人も、もつともつと触れ親しんでいただき、一人でも多くの方に環境問題に関心を持ってもらうため、小田町で環境スクールのオープンしたい」と答えた。

私達環境部会は、昨年から視察研修、講師を招いての環境セミナーなど研鑽を重ね、今年度はぜひプレオープンをと先ず計画を立て、従来、町内の各小学校が毎年夏休みに行っている小田深山でのキャンプの中に、環境スクールを取り入れていただくよう呼び掛ける。

その結果、各小学校ではこの計画に賛同していただき、日程、時間の調整を行うと共に、私達会員もプレオープンに向けて準備に取り掛かり、現地視察、コースの設定、子供達に適し、かつ私達で無理なく行えるプログラムの作成、必要な物品の購入、内外にPRの意味も兼ねて盛大な開校式の開催など、あれこれ議論を重ねる。また、毎週日曜日には現地に赴き、交替でトレーナーとなり実戦的勉強会も積み重ねながら準備していくが、日が迫るにつれて大きな不安を感じ始める。子供達が、自然



体験学習 (山梨県清里)



参川小学校生徒による体験学習 (小田深山)

チャージャーゲームを行っていき。初めは子供達となんとなく距離感があつたが、少しずつ馴れ親しみ、最後には子供達の中に溶け込んでいくこ

と楽しく親しみながら、その中で何かを体験できるようなトレーナーとしての役目だが、果たしてできるだろうか、考えれば考える程不安になる。結局、初めから上手くしようと思うから無理があるので、自分達も体験することによって何かを感じるだろうと腹を括る。

当日は、天気にも恵まれ開校式も無事終わり、さあスタート。五・六年生四十五名を三班に分け、一班十五名の編成で三つのプログラム、ミクロの森(虫メガネで小さな生き物を探す)・暗やみの森(目隠しをしてロープ伝いに歩く)・静寂の森(鳥や虫の鳴き声など自然の音の地図を作る)等のネイ



環境スクール プレオープン開校式

とができた。

長いようで短い一時間三十分であった。私達はこの一時間三十分のために勉強会、準備等に何日間追われたことだろうか。

しかし、子供達が自然を肌で感じ、親しむことが少しでも体験でき、そして一人でも多くの子供達が自然や環境について関心を持ち、理解を深めることができれば、私達の活動も灯を見ることができると思う。

二回目の環境スクールの時は雨

にたたられ、屋内に変更するため、急ぎよ屋内用プログラムを作成し準備に掛かる。ところが、雨も上がったため屋外と屋内兼用のプログラムに変更、何とか環境スクールを行うことができた。子供達の喜ぶ姿や、楽しむ姿を見て、先ずはひと安心。

二回の環境スクールを体験して、私達トレーナーの勉強不足、そして色々な問題点、反省点を見い出すことができた。今後の課題ができると共に、新たなファイトも沸いてくる。

現在、環境部会では、十月に大人を対象にした一日コースの環境スクールを計画している。前回までの問題点、反省点を基に講師を招いての勉強会、視察研修、そしてコースの設定、プログラムの作成と皆んなで頑張っている。

次の目標として、来年四月には本格的に環境スクールを開校しようとして計画している。県内はもちろん県外にもPRして、数多くの人達に小田深山の自然、そして環境スクールを体験してもらうことに

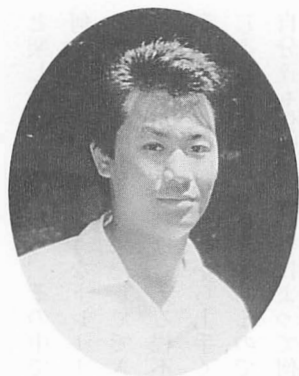
より、環境問題への理解と関心を高めていただくようにしていきたい。また、小田深山の観光事業の一貫としての位置付けとなるよう努力していきたいと考えている。

今まで、町づくりの会に参加して五・六年になる。勉強会、先進地視察と数多く研修をしてきたが、結論が出ない。しかし、町づくりは、机の上の議論ばかりではできない。みんなが汗を流し、肌で感じ、体験していかなくては次のものが見えないし、成功もしないと思う。

「町づくりは人づくり」とよく言われる。先ず、自分自身を磨き、輝かなくては、そしてみんなが輝くことによって自然と町が地域が輝くのではないだろうか。

最後に、様々な問題も多くあると思うが、皆んなで一緒に汗を流し、我が町を日本一の町にしていきたいと考えている。

夢は大きく……。



感動を分かち合うために

宇和島市『21 イロハ塾』

森田 孝嗣



私達の日頃の活動は、毎月の定例会で宇和島の活性化についての話し合ったり、識者を招いての講演会（宇和島の歴史等）を開催する等、ふるさと宇和島をもう一度見直すことで、その資源の活用について模索し、自ら学ぶ姿勢を大切にしてきました。地域のリーダーたる人材育成を図るため、また、

「プリーズ エンジョイ ディス パーティー！」市長の声が一瞬、我々の瞬間、我々 塾生一同は事

業成功の充実感を共有したのです。今年三月五・六日の二日間にわたり開かれた、国際交流事業の交流パーティーでのことです。

「まちづくりは人づくりから」という言葉をよく耳にしますが、私達21イロハ塾は平成三年度に若手リーダーの育成を目的に発足、今年で四年目を迎えます。塾生は現在十七名。



プリーズ エンジョイ ディス パーティー！

異業種、異団体の交流を促進するために、地味ではありますが、その活動を展開してきました。

そういった中で生まれてきたのが国際交流事業でした。

この事業の開催は、塾生の一部より以前からその提案もありましたが、今回直接のきっかけとなったのは、昨年、先進地視察で訪れた、新居浜市の若者塾に触発されたことでした。同じ県内の新居浜市の若者を中心となって、地道に国際交流に取り組んでいる様子を見て、塾生一同、大いに刺激を受けました。

地方における国際交流が盛んと

なり、県内各地にその窓口ができていますが、歴史的に見ても、進取の精神に富んだ宇和島藩士が数多く存在した南予の中核都市宇和島に、未だにその窓口がない事に対して、大変疑問を感じていました。

そこで、その必要性を市民にアピールすること、そしてどちらかと言えば保守的・閉鎖的傾向の強い宇和島の人達にとって、もっと広い視野を持つきっかけにして欲しいという願いが込められていました。

国際交流事業の概要は、初日が外国人と日本人の混合グループに分かれて、宇和島市内の名所・旧跡を中心に散策する「宇和島探訪ツアー」、「交流パーティー」、そして翌日にかけての「ホームステイ」の三本立てでした。

その中で、宇和島に外国人を迎えるためのソ



国際交流事業「交流パーティー」



国際交流事業「宇和島探訪ツアー」

りません。今後はお祭りの要素の強いものでなく、より宇和島らしい、宇和島だからこそできる本当の意味での国際交流に取り組んで

く必要を感じているところでは、**「塾の目的」とは何でしょうか？**
塾生一人ひとりがそれぞれ対等な立場であることは勿論ですが、その目的は、実施する事業の成功にあるのではなく、塾生が活動を通じてお互いに成長する姿にあると思います。
様々な人々との出会いを通じて、そして日々の活動の中でお互いの持つ考えを自由につけ合いながら成長していく姿、これがそが塾の本来の目的であり、まさに、私達21イロハ塾の目的である「人づくり」に他ならないのです。
二十一世紀に向け船出した21イロハ塾は、まだイロハの「イ」にようやく足を掛けたところですが、その本来の目的を達成するには、まだまだ程遠い所にあると言えます。

それは、塾を運営していく上で、塾生全員が個々の持てる力を出し切れていないこと、また年間の活動を通じて見
た時、自分の意見を積極的
に発言・主張する者が限られており、一部の人間が「カヤの外」にいる様な状況が存在することです。一

で、より良い結果が生まれ、人的にも成長していけると思っています。私も含めて塾生が、自分の殻を破り、自分をさらけ出し、それこそ体当たりでぶつかり合い、成長していくことは、今後の宇和島のまちづくりにとって、きつとプラスの方向へ働くと信じています。
先の国際交流事業の開催で、塾生皆が力を合わせれば何でもできる、という自信が得られたこと、大きな感動を得ることの素晴らしさを知ったことが、今後の活動の中できつと生きてくると思っています。
最後になりましたが、私達21イロハ塾が単なるイベント集団に終わることなく、その活動を通じて、素晴らしい感動を味わうために、そして何よりも「心地よい汗」をかき続けることで、私達の愛すべきふるさと宇和島の活性化に微力ながら貢献していきたいと思っています。

先進地視察研修(於：新居浜市)

フト面が未整備であったことに加えて(ボランティア通訳・ホストファミリーの不足等)、当初考えていたよりも規模が大きくなったために、塾生だけでは手に余り、応援のスタッフを頼む必要があるなど、数多くの苦勞もありましたが、それを皆で乗り切ったからこそ、塾生が一つになることができたとと思います。

塾生であると同時に、事務局を務めている私にとってこの状態は、塾のあり方として少し危険なのではないか、と感じているところでは、
こういった問題は、他のまちづくりグループにも少なからずあるようですが、これをどう克服していくかに私達の塾の将来も掛かっている様に思うのです。自分の意見は遠慮して聞き役に徹するのは、国際的にも美德として通用しないのみならず、そこにはむしろ非礼のみです。賛成・反対の意見を合わせて白熱した議論を展開すること

塾生であると同時に、事務局を務めている私にとってこの状態は、塾のあり方として少し危険なのではないか、と感じているところでは、
こういった問題は、他のまちづくりグループにも少なからずあるようですが、これをどう克服していくかに私達の塾の将来も掛かっている様に思うのです。自分の意見は遠慮して聞き役に徹するのは、国際的にも美德として通用しないのみならず、そこにはむしろ非礼のみです。賛成・反対の意見を合わせて白熱した議論を展開すること

で、より良い結果が生まれ、人的にも成長していけると思っています。私も含めて塾生が、自分の殻を破り、自分をさらけ出し、それこそ体当たりでぶつかり合い、成長していくことは、今後の宇和島のまちづくりにとって、きつとプラスの方向へ働くと信じています。
先の国際交流事業の開催で、塾生皆が力を合わせれば何でもできる、という自信が得られたこと、大きな感動を得ることの素晴らしさを知ったことが、今後の活動の中できつと生きてくると思っています。
最後になりましたが、私達21イロハ塾が単なるイベント集団に終わることなく、その活動を通じて、素晴らしい感動を味わうために、そして何よりも「心地よい汗」をかき続けることで、私達の愛すべきふるさと宇和島の活性化に微力ながら貢献していきたいと思っています。

塾生が一つになることができたとしたいと思います。
そして、そこから人の輪が広がる結果ともなった様に思われます。

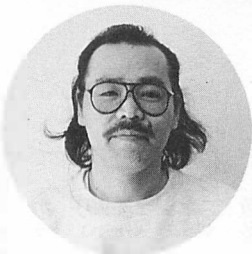
く必要を感じているところでは、**「塾の目的」とは何でしょうか？**
塾生一人ひとりがそれぞれ対等な立場であることは勿論ですが、その目的は、実施する事業の成功にあるのではなく、塾生が活動を通じてお互いに成長する姿にあると思います。



宇和島探訪ツアー(於：県真珠加工組合)

動を通じて見
た時、自分の意見を積極的
に発言・主張する者が限られており、一部の人間が「カヤの外」にいる様な状況が存在することです。一

先進地視察研修(於：新居浜市)



人生意気に感ず

内海村『つわな会』

那須 芳人



功名誰か復た論ぜん。
これは、唐の国の
臣下、魏徴の述懐の
一節でもあるが、西
日本何でもケトばす
会旗章の文句でもあ

人生意気に感ず、

てひょうきんものレ
ッテルをはつてくれた。
我々は、うれしさに家
族と肩を寄せ合つて泣
き、なお一層、胸をは
り、おちよろしにのつ
たものだ。

さて、この会、何者
かというと、何の事は
ない。以前、カヌーの
達人椎名誠氏が、無人
島でサバイバルキャンプをする東
日本何でもケトばす会なるものを
創設した。対抗するわけではな
かったが、我々もこの分野に楽し
みをみいだしていた頃で、「東に
あれば西もあつてもよい」と、冗
談半分でネーミングし、いささか
飛び跳ねたのである。



野草を食べる会デイキャンプ

る。西日本何でもケ
トばす会、通称西ケ
ト会は、つわな会の
前身である。当初、
この名を耳にした方
は、名称の大きさに
驚き、次にバカさか
げんに苦笑し、やが

かくして、自分が楽しければ、
他人から何を言われようと何でも
ネーチャライフに挑戦し、手作
りのドブロクと自然の贈り物に舌
鼓をうつ、ひょうきん族が内海村
に誕生した。ネーチャライフと
いっても、そんなに大げさなもの
でもない。自然の中で自分自身が
楽しめればそれでいい。
ただ、自然と共生する
最低限の理念は会員誰
もが持っていた。

仲間と何年か楽しく遊
ぶのだが、なにかが欠
けているせいか、年を
おうごとに、満足が腹
三分目のガス欠状態に
なった。しかし、そこ
は気心のしれた仲間である。お互
い、酒をくみ交わしながらの言
たい放談により、いろいろとガス
欠の原因は出て来る。だが、根っ
からの単さいぼうなのか、「WH
Y・WHAT・HOWの三語に凝
縮される事を、誰もが自分一人で
蒸し込んでいるのだ」と、素早く、

しかも簡単に結論を導いてしまう。
この場合の素早さは、良いことか
悪いことか、分らないが。そう
して、楽天家の集まりらしく、そ
れを、みんなでもう一度確認し、
新たに、一人ひとりのガス欠を会
全体の問題として取り組みながら
自我意識を養うようにした。そし
て、自分たちと村の将来を担う子
どもたちをターゲットに、「仲間
と共に楽しく暮らす」という腹八
分目を目指した。

そんな中、毎年行われている、
野草を食べる会を開催した。人里
離れた海岸でデイキャンプを張っ
て行うのだが、この海岸は海山の
幸が豊富にあり、子供から大人ま
で毎年楽しみにしている。例のご
とく、この海岸にある野草から貝
類まで、その場で食べてしまうの
だが、どうしてもその場では食べ
れない美味な草がある。キク科の
多年草ツワブキである。内海村で
は、つわなといつて、春の食材と
して欠かせない。このつわな、莖
の表皮をとらなければならぬの
はもちろんであるが、灰汁もたら



つわぶきの皮をとっているところ

なければ口にす
ることはできな
い。その、作業
をしながら酒を
くみ交わし、海
端よもやま話で
花をさかせてい
た時、誰ともな

と、二年前に、『たまさか劇団』
を旗挙げし、地方巡業を中心に日
夜たまさか頑張っている。
また、前述した野草を食べる会
やホゴ釣り大会など、家族で自然
体験をすることをテーマにした
『西日本何でもケトばす部会』。
前身の西ケト会を五部会の一つに
吸収した。

いる。
『研修交流部会』。学習会や誕
生会を主に行っているが、昨年は
他団体との共同で、内海進歩自由
夢を初めて試みた。
そして、毎年会員のテンション
が高くなる『クリスマス担当部会』
の、うちにもサンタがやってきた
事業。事業初年度は、全村の小
生以下をカバーするというこも
あつて賛否両論の風が吹いたが、
『度胸と汗と知恵』を出し合つて
実現することができた。ただし、

今も、仲間全員が
ひそかに企んでいる
長年の夢がある。誰
も住んでいない荒野
にログハウスをつく
り、そこを拠点に
ネーチャーライフを
楽しむこと。そして、
やがてくる老後も、その地におい
て夢と、遊び心と、向上心を失わ
ないで過ごすことである。もちろ
ん来る者はこぼまずである。



ほご釣り大会の閉会式で

くでた言葉が、「我々も灰汁をぬ
かんとなあ」「そしたら、つわな
会にしようや」で名も決定。一九
九〇年、つわな会館もつくり、人
生意気に感ず二十六名のTUWA
NA号は順風満帆の風をうけ出航
した。

子どもたちをお寺に集め、宿泊
修行させたり、昔の往還探索など
や他団体との交流を行っているの
は『地域間交流部会』。特に、狭
い地域内での連帯強調だけでは、
閉鎖的な地域社会になるおそれが
あり、小さな自己満足におちいら
ないために、発足当初より長野県
の根羽村との交流を続けている。
現在、初期段階でのネットワーク
づくり已成功し、山間の村と海辺
の村とで、自分とふるさとを見つ
め直すコミュニティの創造を
図っている。これに加えて今後、
利潤を求めない経済交流（主に特
産物紹介）活動をおおしての共同
事業等の交流は、より豊かな場を
提供するものと考え、模索をして

子どもたちの夢を膨らませるため、
また決して失望させることのない
ようにサンタは慎重過ぎるくらい
に神経を使った。そのせいか十二
月二十四日のラップランドに一番
近い村の夜は、サンタと子どもた
ちの感動で雪も溶けると聞いた。
このように、会員が五つの部会
に分かれることで、それぞれが得
意分野で個性と実力を発揮し、責
任をもって楽しんでいる。しかし、
どういつか、如何なるときも酒
がつきまといっている。誰かは分か
らぬが、頭がいたい問題だろう。

今のように毎日一
リットルの汗をだし、
夜には三リットルの
毒を飲む日々を、過
ごしていきたいと、
しつこくこだわって
いる。

以来、五部会からなるファンク
ショナル組織で多彩に展開してい
る。：つもりである。

子どもたちに本物の芸術をこの
村で観たり、聞いたり、触れたり
する機会を企画
し、実施してい
る『イベント部
会』。それだけ
で物足りないの
か、自ら子ども
たちに「感動を」

子どもたち共二十年後、三十年後も
今のように毎日一
リットルの汗をだし、
夜には三リットルの
毒を飲む日々を、過
ごしていきたいと、
しつこくこだわって
いる。

今にもサンタがやってきた



たまさか劇団の
影絵



うちにもサンタがやってきた

過疎化の波を越えて

福井県立大学専任講師
放送大学客員教授

岡崎 昌之

(元財日本地域開発センター企画調査部長)

〈過疎地域リーダー国際研修〉

昨夜は少し遅くなってしまった。現在進めているプロジェクトの関係だ。全国の山間過疎地域から十名の若手地域リーダーを募集して国内研修を実施し、その成果をもとに海外での研修に参加してもらう。その海外研修へ向けての壮行会を銀座の「近所」でやったのだ。七月下旬の少しハードな国内研修以来、二ヶ月ぶりに集まった研修生達だったので随分と盛りあがった。

このプロジェクトは「山間過疎地域リーダー国際研修事業」と

名付けられている。今年で五年、

今後も五年間継続していこうという長期の試みである。プロジェクトの概要を説明すると、まず全国の山間部の過疎に悩む市町村から、将来地域を担おうとする若手リーダーを十名募集する。三三〇〇の自治体の中からのので、微々たるものに過ぎないが、同じ地域から一年に一名ずつ三年間にわたって派遣をしていただく。

こうして、一地域で三年間に三人の若手リーダーがトレーニングを受けることになる。一人で頑張るのは大変だが、仲間が三人いれば少しは拠点になるのではないかという発想だ。だからできれば一

人は役場、一人は農協や森林組合などの地域組織、最後の一人は農業者などの自営者と立場が異なるのが望ましい、と我々は考えている。また、そのうち一名は是非女性にとも願っている。

昨年からの国内研修は山梨県の早川町にお願いして、そこを研修の場としている。かなりハードな国内研修スケジュールは、山梨大学の花岡利幸教授のグループYRP（山梨地域計画研究会）の皆さんが主に担当してくれている。一週間の研修では、地域づくり実践家の体験談、地域づくりの哲学、パソコン通信入門、そして地元早川町のフィールドスタディとまちづくりへの提言といった実践的なものである。

もちろん海外研修をひかえて、提携先のアメリカ・オレゴン大学のヒバード教授、SAB（スイス山岳居住者支援協会）のヴァイデル会長にも、国内研修に合わせて来日してもらい、オレゴン州とス

イスの過疎地域の現況と政策、具体的な取り組みについて説明をしてもらおう。

こうして五年間続いてくれば、この過疎研修生のネットワークもすでに全国に五十人の仲間と、各研修に参加していただいた専門家の方々、そしてオレゴンとスイスにも広がっているとということになってきた。

〈過疎化の波〉

周知のように国の過疎対策の支



援については、一九七〇年の第一次、八〇年、九〇年にそれぞれ第二次、第三次と過疎地域の振興のための法律が制定された。しかし過疎化の波は衰えるばかりか、法律によって過疎指定される市町村は増えるばかりである。現在では、一九九市町村、国土面積にして約四七%が過疎地域ということになっている。

これら過疎市町村では、地域の中心部から車で二十〜三十分入った集落でどんどん過疎化と高齢化が進んでいる。過疎プロジェクトが国内研修の場であった早川町でも、先般訪れたある集落では、かつては三十戸ほどあったそうだが現在残っているのは僅かに六戸、最も若い人は六十五歳ということであった。この集落はこれから何年存続できるであろうか。

これはなにも珍しいことではない。たとえ過疎指定を受けていない市町村でも、このように中心部から離れた周辺部の集落で過疎化が進んでいる。また、奥地の過疎化には気がつきにくい。人間と同

じように末梢神経や毛細血管の破壊は身体全体の健康を損なう大きな原因となる。

〈過疎の波を越えて〉

過疎の波を乗り越えるためには、幾つかのことが必要だろう。まずは、まちづくりを担うリーダーの重要性だ。過疎化が進んでいるその地域の中で、何が地域の個性で他に誇りうるものなのか。それを的確に見出し、活用し、目標に向かっている確に組み立てる。地域づくりに必要な人材を見出し、元気づけていく。そういうリーダーが必要である。

また、リーダーに欠かすことのないのが、ネットワークと情報である。とかく地元では孤立しがちになるリーダーには、地域の内外に先輩や専門家、また助言をしてくれる人達といった人脈や、様々なネットワークが不可欠である。そうしたネットワークを通じて勇気づけられたり、困難に打ち

勝つ方策を見出したりすることができる。

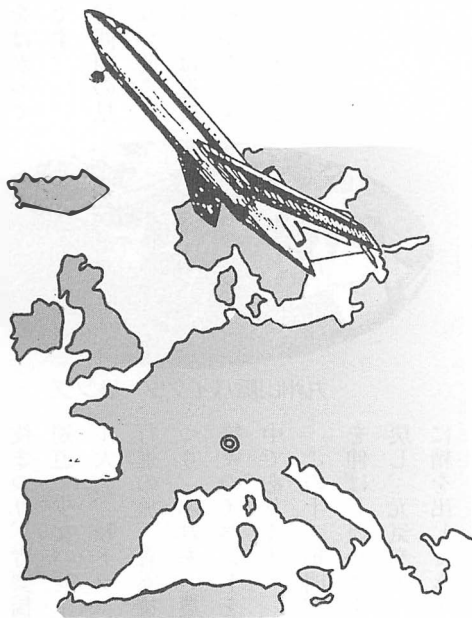
もう一つは情報だ。これまでとすれば地域の内側に向きがちであった視点を、地域を越えて、地域を客観的に見つめ直す新しい視点を構築しながら、過疎を克服する情報を獲得することである。

たしかに地方の過疎化は、世界の先進国における共通な課題でもある。スイスやドイツのように過疎を始めとする条件不利地域を克服する政策を、州や連邦政府が積極的に掲げ、かなりの成果を挙げているところもある。またアメリカ・オレゴン州のように森林地域

のコミュニティ再生にある兆しを見出している地域もある。

地域の中に埋没することなく、過疎を見つめ直す視点を地域の外に、また海外にまで拡大して、ネットワークを構築し、情報を収集することが必要である。

前述の山間過疎プロジェクトの研修生も、スイスへ向けて勇躍出発しようとしている。いやたった今、成田から電話が入り、予定の飛行機が五時間遅れそうだとのこと。海外との交流もなかなか大変だ。



キラリ 光るまち

日之影の光創造 発信

宮崎県日之影町
企画開発課長

甲斐 好夫

町の総面積二七七・八haの広大な土地も、その九二%は山林で、耕地率三%弱の生産基盤のため、その生産性は極めて低い産業構造であり、これをのりきる施策が緊急の課題でありました。

昭和五十八年、その希いを受けてスタートしたのが、梅戸新町長

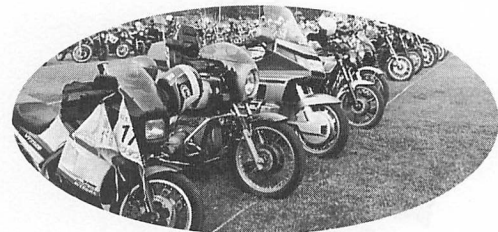


さらに成果を上げるために、大消費地である宮崎市、福岡市へとアンテナショップという形で進出

地直送による「村おこし屋」の開設による所得の追求でありました。そのいずれも町が大きく助成するもので、その成果は年々向上してきています。

による町政であります。その柱は所得の倍増と過疎からの脱却でありました。

し、定着化をはかっているところですが。次に、山村問題の見通しのきかない昨今、泣き言ばかりでは進展がありませんから、永年住み慣れたわが里に、誇りとするもの、自慢とするものはないかを学習する中で、石垣の村、英語の村、歌舞伎の里、かもしれないフラワーパーク日之影、日之影キャンプ村等々のネーミングで、自然の幸、歴史文化の幸を活かした村おこしを定着させています。



九州山脈バイクツーリング

伎まつり、青雲橋少年剣道・少女バレーボール大会、軽トラック大行進の旅、青雲橋夏まつり、ふれあい農業祭等々のイベントを継続中であります。

この十二年間、所得を伸ばし豊かさを取り戻し、元気を出すことに精を出してきました。

結果、今では「日之影」の地名も、広く理解してもらえるようになり大変うれしく思っています。

とは申しまして、年々都市との格差は増すばかりです。しかも高齢化率二六%は県下でも一、二位を競うほどになり、これを支え、なおかつ、乗り切る施策が急務となりました。このことは、ひいては若者がいつでも安心してUターン出来るふるさとづくりを展開していく上でも重要なことであり、そのため次のような対策を講じて参りました。

その一は、次元の高い考えと実践力をもった人づくりであります。

同時に、年間三六五日、人々が訪ねてくる町づくりの推進方策として、九州村おこしカーニバル、九州山脈バイクツーリング、歌舞



青雲橋夏まつり

い相乗効果を発揮し、土壌は発酵・合成型となり、化学肥料や農薬がなくても高生産を上げ、連作も可能となります。しかも、環境保

かつての竹下内閣のおき土産であるふるさと創生資金一億円を基に造成し、平成三年からその果実による人材育成制度をスタート。型にはめず自分の企画でというこ

すでに「五感の集い」「感動体験森の学校」を毎年開催し、都市部との交流促進を図っているところ。その二は、本物づくりです。一次産品の物づくりにおいて、今の化学肥料、農業本位の物づくりでは連作障害、病害虫の多発、農業者の健康阻害、環境汚染、農産物価格と生産費のアンバランス等々問題ばかり、狭い生産基盤の本町農林業は壊滅すると判断し、たまたま琉球大比嘉照夫先生開発のEM技術に接する機会に恵まれ、早速その技術を導入しました。EMとは、自然界にいる五科十属八十種以上の微生物群で、土壌の中



九州村おこしカーニバル

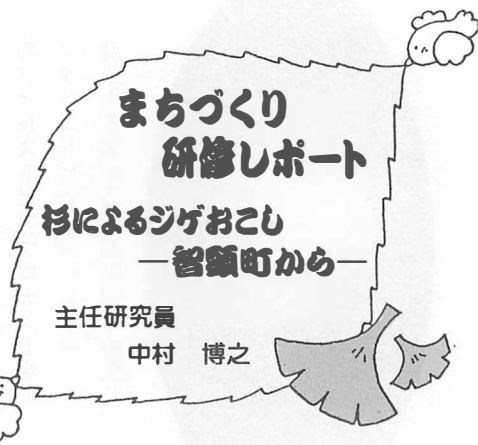
全・健康増進等すべてが蘇生の方向へ進むというもので、すでに町内二十数名の実践者による三年間の実績があり各種作物、畜産、生ゴミ処理等その方向性は固まりつつあるところ。その三として、村おこし総合産業株式会社

の設立です。農林業が本町の基幹産業ですが、ごく一部の農家を除いては、大半が弱小基盤の兼業農家群であります。その中でも、地元各事業所等で働いている方々は、それなりに生活も安定し、農林地にも手をまわすことができているが、そうでない弱小経営の兼業農家群においては様々な問題を抱えており、それを支援する施策として一次、二次、三次の各産業を有機的に連動させ、生産性の低い農林業の活性化を図り、手遅れ林分の解消と遊休農用地の有効活用、さらには環境保全、高齢化対策と就労の場の拡大をねらって、

今年十月に第三セクターによる「日之影町村おこし総合産業株式会社」を設立する予定です。日之影の地名は、元来陽光がさんさんと降り注ぐ意味をもっています。そして、数万年の太古から人びとが住んでいたと言われる「出羽洞穴」という遺跡もあることから、もともと人の住みやすいところともいえます。数は少なくても「どうだ、いい町だろう!!」と胸をはって言える高い次元の意識をもった町民がいて、健全な自然環境の中で、健全な生活を定着させることが、よりひそやかな豊かさ、発信力をもった「日之影」の町づくりとなるのです。その為にも、もう一ふんばりしなければなりません。



東洋一の規模を誇る「青雲橋」



今年の六月六日、「地域づくり交流研修」の下見を兼ねて鳥取県智頭町を研修訪問した。

智頭町は、鳥取県の東南部に位置し、中国山地の山懐に開けた人口約一万一千人の町である。山陰と山陽を結ぶ宿場町として古くから交通の要衝であり、現在も主要道である国道五三号線と三七三号線が中国自動車道と直結しており、山陰・山陽だけでなく広く京阪神を結ぶ動脈として利用されている。また総面積の九三%が山林で、古くから林業の町、杉の町として栄えてきた。

過疎と高齢化が進む智頭町では、全国的に広ま



前橋登志行さん

た。「ふるさと村」は、町の中心部から車で二十分ほどの八河谷地区にあり、京阪神

ってきたムラおこしが早くから叫ばれていたが、昭和六十年のわかつり国体を契機に、ジゲおこしの火付け役として『智頭木創企画』が設立され、杉の木を利用した民芸品づくりを始めた。その後、自発的にできた思い思いのグループを母体として、昭和六十三年に「智頭町活性化プロジェクト集団（略称・CCPT）」が誕生した。その中心的役割を果たしているのが寺谷篤氏、前橋登志行氏である。

CCPTでは「住民自治」「地域経営」「地域共有」「地域の国際化」「社会開発システム論」という五つの活動指針のもとに、「社会経済」「木材・林業」「人材養成・国際化」「企画開発」の四つの委員会が置かれ、緻密かつ専門的なレベルでの地域づくりが進められている。

りを見せている。今回の研修では、智頭町役場の小林総務課長に町の概略について説明を受け、同じく総務課の草刈さんに町内を案内してもらい、最後にCCPTの前橋登志行氏にお会いした。

CCPTが最初に取り組んだ事業は「ふるさと村」の再生であった。「ふるさと村」は、町の中心部から車で二十分ほどの八河谷地区にあり、京阪神

最後に、今回の研修でお世話になった皆さんに感謝申し上げます。ともに、今年度の交流研修で再びお会いできることを楽しみにしております。



新潟県安塚町で行われた、第三

回環境自治体会議の後、今年の五月二十七日に長野県栄村を訪れた。

そこで、(有)ユーライフを運営されている島田伯昭さんの村づくりのコンセプトについて、所感を交えながらレポートをいたします。

栄村は、県の最北に位置し、人口約三、〇〇〇人、面積二七一・五㎏で、農林業とキノコ栽培を基幹産業としており、三十一の集落からなる過疎の村で、高齢化率も二七％に達している。

私の訪れた秋山郷は、そんな集落の一つで、苗場山、鳥甲山など二、〇〇〇m級の山々に囲まれた山紫水明の里である。道中の山道から、眼下に広がる雲海の隙間に、

忽然と現れた集落

“秋山郷”を見た

時、例えるならば、

アニメ映画「天空の城ラピュタ」の

ような印象を受けた。まさに、驚きと感動を覚えると同時に、その集落を包み込むような雪渓に抱かれた山々の大きさ、美しさに思わず声を失ったほどである。この素晴らしい瞬間をともししたのは、案内人の島田さん、この研修をコーディネートしてくれた地域計画研究所（東京）の田嶋利夫さん、それと沖縄県読谷村の4名の方と、便乗をさせていただいた私を含め、計7名の一行であった。

【序列に入らない、体に体積が欲しい】

まちづくりにかかわり始めた当時は振り返って、島田さんは、情報の不足、閉鎖的な生活習慣、それに嘆きや諦めといった村人の生活意識の脱皮を図るため、これからは「住民自身の持っている特性を活かし、人々の内面にまで刻印された(古い)序列を変化させ、自発的な活動を引き出すことにある」と言われ、具体的には「各種の生活技術に対する評価をどのようにに行い、その活用の選択幅を拡大する体制を創造することであり、縦社会による上下関係から脱却し、幅のある密度の濃い心の体積を増

す努力から始めた」と言われた。また、島田さんは「私は、村に住むお年寄りから、昔のいろんな話を聞くのが好きだ。そのふるさと歴史を知り、残すべきもの、創造するものを考えていくことが大切」と言われる。

そんな過程の中で「ネコツグラ」という、ワラで作った猫の家。

それは、「村のある老人が、子供の頃、父親が桶刈りの後の残ったワラを使って、猫の小屋を作り、囲炉裏の側に置いていたのを憶い出し、少しずつ編み上げた。これが、昭和六十一年に設立された、財団法人栄村振興公社に持ち込まれたことにより、村の中に伝統技術の復活として徐々に広まり、冬季の手内職のようなものになった。その過程で、それぞれ得意な作業工程を教え合うといったコミュニケーションも生まれ、今では製作が追いつかないほどの販売状況になった」とのことである。

また、そのお話を伺った夜、おいしい沖縄の酒“あわもり”を酌み交わしながら、一人暮らしの老人の方の検診から、子供のケガの

治療と、孤軍奮闘される診療所の看護婦さんを収録した放送局の取材番組を見ていると、島田さんが「いいぞ！ガンバレ栄村！」と叫んだ。その姿に、まちづくりにかわる島田さんの情熱と心意気、そしてやさしさと包容力を感じ、とても感銘を受けた。

いろいろな地域を見たり、識者にまちづくりに対する考え方を学ぶことも大切であるが、自己の見識や人間性を高めるには、このような感動をする機会を自ら創ること、そして旅をすることで、自分を、そして地域を顧みることだと痛切に思った。

最後に、経済優先から精神的充足へと、そこに住む人々の豊かさを取り戻すことで、今日の文明社会がもたらした豊かさの中で、忘れられてきたもの“を感じさせてくれる何かが、栄村にはある気がしてならない。

そう感じさせてくれた島田さん、それと、この研修を計画して下さった田嶋さん、それに心温かい読谷村の方々に、心より感謝するとともにお礼を申し上げます。

欲望と
まちづくり



川之江市
石村秀記

先日、新宮の脇さんの紹介で、リレーでちょっとトークに載せていただくことになりました。これも、アトリエUMAの交流のお陰だと思ひ、喜んで引き受けました。私は、川之江J.C(青年会議所)に入会しています。J.C活動の中

のひとつに、リーダーシップの勉強があります。その中で、マズローの欲望の五段階説を学びました。その概略は、次のとおりです。

第一段階 生理的欲求(衣食住及び生命を維持する)

第二段階 安全・安定の欲求(財産、健康、職の維持。自己保身)

第三段階 社会的連帯欲求(集団に属し受け入れてもらいたい)

第四段階 自尊欲求(自負心の満足。他人の尊敬を得たい)

第五段階 自己実現(使命感。最大限の可能性)

以上の段階があり、人が動くのは全てこの欲望に入るのですが、分かっているも案外定義づけは難しい様です。そこで、独断と偏見で私見を述べたいと思います。

日本を欲望の段階から見ると、第一・第二段階を、戦後死に物狂いで充実するために頑張ってきたと言っても過言でないと思います。



そして、現在、第三・第四段階を国際貢献として諸外国から求められています。さらに、第五段階を(地球に対して何をするか使命感)求めて行動しなければいけない時代に来ていると思います。

では、日本各地のまちづくりはどうでしょうか?第一・第二の視点で行う公益性を重視した、まちづくりが多いのではないのでしょうか(地域経済の格差、人口の格差はあるにしても)。今は、地方分権の時代、自立したまちづくりを求めています、それには個人が第三・第四の欲望の視点で考えなくては難しいと思います。

さて、個人はと言うと、ほとんどの人は(私も含めて)第二の欲望に多くの時間を費やし、なかなか

か第四・第五の段階は難しいと思います。

しかし、私は四十歳から五十歳までに、第一・第二の欲望を満足(充実)させるか、吹っ切れるかどうかを、人生五十歳から第三の人生に充実できるような、第五の段階、「自分は、何のために生まれてきたのか」の使命感を求めていきたいと思っています。



「手づくり産品で 消費者と交流」



一本松町 民家トラミ

三軒両隣は身内同様、喜びも悲しみも共に分かち合ってきました。

私達は農業改良普及所の指導で自給度の高い暮らしを呼びかけようと、五億円の自給運動に取り組み、南宇和の特産品づくりを呼びかけ、ついに御荘郵便局とタイアップして、「ふるさと小包」を誕生させることができました。最初は手始めに年一回の発送を試みたのですが、これが好評で会員も勇気づけられ、以来十年間で二十八回を数えるまでになりました。発送個数も年々増加し、平成五年度は千八百個に達し、平成六年度第一便も目標個数を上回る三七二個の発送をすることができました。

今、社会の移り変わりの中で、物質面での生活は豊かになっていく反面、暖かい人間関係は次第に薄れつつあります。我々だけでも、思いやりのある人間にならなければ、これからの家庭づくり・まちづくりはできないのではないかと思います。

そんな思いがつのり、昭和五十八年四月、私達のグループ「すみれ会」は中川地区に産

声をあげました。平均年齢四十五歳、ほとんどが三世代同居の兼業農家の主婦で、向こう



もあり物を作っていく自信をなくすような事も何度かありました。

しかし、「ご苦労お察しします。なつかしい田舎の味、子供の頃

を思い出しました。頑張ってください」。そんなお便りをいただく勇氣百倍、「よし!!頑張るぞ」という気になります。

昭和六十三年度に、「一本松町ふるさと生活館」が建設され、私達の永年の念願だった加工施設ができました。私達は生活館を活動の拠点として、たけのこ、あられ、味噌、豆腐、漬物類

など、共同加工によって添加物なしの自然食品を食卓に並べ、家庭での経済効果を高める傍ら、心と体の健康づくりにと、町行政と一体となり、どんど焼、健康まつり、サマーフェスティバル、文化祭等、町のイベントの盛り上げ役として、ふるさと市やバザーを催し皆さんから大変喜ばれております。

地域産物を有効活用した特産品づくりも、平成五年やっと実を結び、ひがしやま、きゃらぶき、おぼろクッキー、しいたけかりんと、あられ、あけぼのせんべいの



南インドの一流ホテルのシェフを講師に 本格的なインド料理学習会

六品が全国手づくり加工品推奨品として認定を受けることができました。今、男女共同参画型社会の形成が大きく叫ばれておりますが、私も明るいまちづくりの一部会員として、あけぼのリフレッシュゾーンへ特産品売場の開設を強く要望しております。

こうしたさやかな活動の中から手作りを通して、地域の人たちと助け合い、昔の様な自然と人情に支えられた農村文化を守っていくとともに、新たな生活文化の創造に向けて、頑張つて参りたいと思っております。

年々、高齢化の進んでいく現状を見る時、私達も例外ではありません。老後の生きがいと、健康で住みよい農村生活を目指して、微力ながら仲間

づくりに貢献していきたくと思っております。

リレーで
ちよっ
トーク



— 地域を生きる — 地域に根ざした教育活動

松山市立日浦中学校長

宮内正民



の人々が生活しています。

日浦中学校は、松山市の水瓶石
手川ダムの上流に位置し、松山市
の中心部から車で四十分、美しい
山林や竹林に囲まれ、野生の鹿な
ども生息する素晴らしい自然に恵
まれた地域環境にあります。

産業面では、林業を中心に、米、
ホウレン草、花の栽培などが行わ
れておりますが、農山村の課題と
もなっている過疎化、農林業従事
者の高齢化が進行しています。生
徒数も昭和三十七年度、一四四人
をピークに、現在は十九人となっ
ています。地域では活性化のため、

児童生徒の減少対策や、平成八年
度に玉川町へ開通が予定されてい
る国道三一七号線への対応などに
取り組んでいるところです。特に
今年六月には、PTA会員を中心
とした「日浦若者塾」が結成され、
男女約四十名が、地域活動の中核
的な働きをしようとしていること
ろです。

このような中で、中学校も地域
に開かれた学校づくりを目指し、
中学生が地域の課題を見つめ、積
極的に社会参加をし、地域の一員
としての自覚を持つよう、地域と
一体となった教育活動を進めなく
てはならないと考えています。ま
た、中学生なりに、しっかりと地
域に生き、幅広い交流体験や諸活
動を通して、自己を確立していこ
うとする姿勢を育てようと思っ
ています。このことは、これからの
変化の激しい社会において、主体
的に対応できる心豊かな人間の育
成という視点からも大切なことで
あると考えております。

「地域の産業に活かす炭やき、木

酢液の研究

昭和六十二年に、地域の伝統技
術を伝えようと、地域の人々に
よって、校庭に炭焼き窯が完成し、
生徒が炭焼きを行っています。平
成五年度からは、炭焼きの過程で
煙から採れる「木酢液」の研究に
取り組んでいます。木酢液は、昔
から植物の防虫や活力増進、土壌
改良等への効果があるといわれ、
最近では、有機栽培などへの関心か
ら注目されているものです。この
学習活動は、全校生徒十九人全員
が、取り組むこともありますが、
主には、炭焼き班と栽培班が取り
組んでいます。県林業試験場から
の資料や日本炭やきの会、杉浦銀
治先生の指導を受け、本格的に取
り組んでしま
した。炭焼き
班を中心に学
校で何回も合
宿し、煙の温
度、木酢液の
水素イオン濃
度の測定を行
い、現在は、



炭焼き



木酢液の採取

同じ木酢液採取装置が取り付けられ、松山市森林組合から製品化されたものが販売されるようになり、生徒の手で採取したのも出荷され、生徒は大変喜んでいきます。そして、今後さらに、日浦の豊富な竹を活用して竹炭や竹酢液の研究にも取り組もうと、はりきっているとあります。

「地域の美しい自然を守る、ホタルの放流」

日浦地区は、以前から「ホタルの里」と言われ、たくさんのホタルが飛びかう美しい光景を目にすることができました。しかし近年は減少傾向にあり、中学校におい

市販の製品と並ぶものが採取できるようにになりました。また、採取方法の研究と並行して、栽培班が中心となって、木酢液や炭を使用した栽培試験や、ホウレン草農家での試験、稲のイモチ病等への活用など、農家の協力を得ながら効果的な活用方法の研究を行っています。

ます。

昨年十一月には、生徒が日浦公民館主催の地区大会で、研究成果を発表し、地域住民から、注目と激励を受け、「自分たちも地域のためにやれるんだ」という自信を深めております。また、その後、地域にある炭焼き窯にも、学校と



ホタルの放流



水質検査

て、その復活に取り組んでいます。昨年から、ホタル班が中心となって、水質調査や分布調査を行うとともに、メスのホタルを捕獲して、幼虫の放流を行っています。地域の人々も、夜、学校に集まりメスの捕獲に協力していただいたり、各地区の区長さんを中心に、生活排水の多い河川に竹炭を敷いて水の浄化なども行われています。生徒たちもホタルの放流にとどまらず、竹炭を使用した水の浄化などに取り組んでいるところです。

最近、地域の方々から、忙しくなったということをよく聞きます。

それでも「中学校が頑張ってくれから、ええことよ」と協力や支援を惜しみなくしてくれます。先生には、地域の自然や文化、産業が語れること。そして、車を止めて、校区の人々と気軽に話すこと。更には生徒や保護者、そして地域の思いや願いをとらえて教育を進めることをいつもお願いしています。現在は、学校の校庭に、炭の原木が高く積み、炭窯もフル回転の状態です。素直で活発な生徒、地域にしっかりと根をおろして生きている人々との出会いと語り合いに、日浦中学校に勤務している喜びを感じる日々を送っています。



栽培班の活動

管見 スイスを歩いた2週間／見想録(Ⅻ)

「棲み分け原理を洗練した国」 宮本俊一

◆不覚／Tさんに迷惑な二人旅

「アッ切符がない。しまった！ホテルの脇机だ……」 マランス駅から『リヒテンシュタイン公国』へ向う列車の中……勿論、私の不覚切符は……チューリッヒから国境のゼーベレン往復。少々高くても買

い替えればよいが、あの運賃半額／割引カードの紛失は、グループに迷惑をかけるかも……と思う。

粗忽な行動派の私、独り合点で……「福留所長に、宿へ切符を取りに帰り……後を追うと伝えて！」と言い残し、次の駅で降りるや反対ホームへ向う。ふと人の気に振り向く……Tさんだ。福留所長が私のエスコートを依頼されたのだ。

お陰で、語学不能の私は……楽々切符を探し、好みの道草にも遇って……Tさんの人柄と仕事の情熱にも触れた。しかも二人旅の想い歩き……でラインを渡り、アルプス中央部のミニ国家／リ公国（面積

／小豆島程度・人口／二万五千人）の美しい景観も堪能できた。

後日、案内書を見ると、私が特別コネでグループに交付と思った割引券は、主要駅なら誰でも買える……鉄道、バス、湖船、ロープウェイの共通『半額旅行カード』だったよう。他にも、旅の性格で選べる……各種「割引制度」もある模様。さすが観光の国……とは思ったが、私の不覚で……Tさんの貴重な一日を棒にした悔やみが重い。

実は、私たちの旅を……現地でお世話下さったのは、「スイス連邦工科大学」の福留克好先生だが、その細心なご配慮を……各ホテルのお手配やミュンヘン研修等で……身に染みていた私は、「運賃半額は学割……だ」と早合点したワケ。

◆近自然／裏支えの恩人お二人

漏れ聞くと……福留克好先生は、『近自然河川工法』を学ぶ私たちに……大恩人だ。「スイスに、近

自然河川工法あり……」と知られた福留所長は、その手がかりを……克好先生に求められ……専門外の先生は、通訳の山脇正俊さんとご苦心の末、前掲／クリスチャン・ゲルディさんをご紹介とか。

以来、福留所長ご指導で、毎年スイスを訪れる……全国の近自然研修グループは、お二人りにお世話頂いてきた。また、八八年のゲルディさんの五十崎初来日で、九一年に始まった『近自然工法／国際ワークショップ・日本シリーズ』もお二人の裏支えに負うよう。

そこで私の想いは飛躍する……。もし、アインシュタインを始め十人ものノーベル賞受賞者を出した名門／スイス連邦工科大学がなかったら……克好先生はスイスには不在？私たちの川の運動はもとより、現在、全国で進められている……建設省の『多自然型川づくり』も、今の姿はないのでは……と。

その大学は、一八五四年／初代連邦政府の創設だったが、それには……文化の集権化反対の保守派、文化のドイツ化を恐れるフランス

語系の人びと、これを背景に色々な思惑で反対する各州政府等と激しい政争の結果、連邦政府は「以後、連邦立の大学設置をしない……」と譲歩したとか。何故？私の想いは、連邦建国の時代に……。

◆意外！／敗戦邦参画の新憲法

意外だ！内戦圧勝の自由主義急進派諸邦は、古い国家連合を廃止し……統一国家とする『憲法草案』作成を、旧誓約同盟が選んだ「憲法起草委員」で行っていた。本来、新たに国民が選ぶ『憲法制定議会』で行うべきを……。しかも旧分離同盟諸邦代表も加えてだ。

従って……新憲法は、急進派の眼目／「連邦の統一」でも、連邦政府の権限は、主に外交・軍事となり、経済は郵便・通貨・度量衡等の基礎条件に限られ、各州の各種「法制定権」は、連邦憲法に抵触しないなら……の大幅な容認だ。

また、連邦の最高決定機関／『連邦議会』は、人口二万人に一人選出の「国民議会」と、人口に関係なく……各州二人の代表による「全州議会」の二院制で、先議権を各

め：両院対等の権限である。

さらに憲法の制定・改廃は、国民総数の過半数支持に加え、過半数の州での多数支持が必要と：小州に人口比以上の力を与える。

もつとも、急進派第二の眼目／個人の自由権では、新聞、結社、居住・移転、職業選択等の自由を定めた。しかし信仰の自由は、「分離同盟戦争」の名分もあり：イエズス会禁止の制限を加えた。

そして、その成立は：各邦が個別に「住民投票」にかける柔軟な仕方：邦数／三分の二、人口／八分の七の支持を見た。ここに誓約同盟が：憲法成立を宣言。一八

四八年九月二十二日、同盟五〇年の波乱の幕を：平穩に閉じた。

◆原点／『地域自治』の国づくり

これは、自由主義急進派が、内戦の覇者たる力の行使を抑制。主義主張の制度化よりも：邦々の自主性尊重を主眼に、対立各州間の妥協を生み出す方式で、統一国家の枠組み構築を狙ったようだ。

しかも、スイスの体質に根ざす課題。三つの言語と二つの宗教が

絡む：アルプス地域、中央平地、

ジュラ山地の地域性に、都市と農村の問題が加わった：地理的・社会的に異質で多様な要素を、各州伝統の『地域自治』で融合し、その各州間の妥協を図って：緩やかな国家に結合する「方式」だ。

他方：西欧諸国は、この頃から急激に集権的国民国家に向っており：時代逆行の感だが、伝統の棲み分けルールを：歴史が鍛えた

『地域自治』に原点を求め、近代的民主国家を目指す：と視る私は、これぞスイスの理性だと想う。

◆新連邦／合意づくりの諸方式

四八年十一月、新たな連邦の首都／ベルンに新議會召集。新設七省の長官（大臣）を兼ねる政府メンバーを選出：連邦政府が誕生。

七人は、議會で多数の：自由主義急進派だが、若い一人の他は四〇代の穩健な中道派という配慮。

彼らは、英国型の首相中心／内閣制でなく、平等前提で全員一致の決定をする「合議制」を採用。

大統領は七人が一年交替で：閣議の議長と、形式的な元首となる：

現在まで続くルールを決めた。

加えて、当初の政府職員五〇人という少数カバールのため、連邦の立法や政策立案に、各州や民間が参画する：「専門家委員会」と「事前聴取」の制度を創設したが、これも今日まで続く：連邦・州・市町村を通じる民主行政の要。

もつとも、初代連邦政府の初仕事：関税、通貨、度量衡、郵便等諸制度の統一は、各州の強い発言

力で：利害の調整に苦勞するが、とくに、鉄道建設許可権と前述の連邦立工科大学の問題は、連邦の大幅譲歩となる。これに乘じ：政策執行の稚拙な州では、旧分離同盟保守派の巻返しに成功する。

◆常に／時間をかけた合意形成
それは自由主義急進派を、「妥協の新憲法で：国民を政治に参加させる民主化を不十分にしたため」とする急進派と、現状満足の自由主義派に二分し、急進派は：各州で民主化運動を展開する。

運動は、(1)州政府の決定を住民が承認する州民投票制（レフェレンダム）と(2)州民提案を決定する

住民発案制（イニシアティヴ）(3)州内対立の妥協方式／諸党連立政

権化（連邦も後に採用：現在に続く）等を：各州で成果させた。

各州のそんな趨勢は：六〇年代に、連邦憲法改正の様々な論議を呼び：一八七四年、諸州採用の国民投票制と連邦権限強化を加え、

基本的には現在に至る『憲法改正』を実現：国制を定着させた。

その後も産業革命や一次・二次世界大戦等があり、新たな近代的課題も生じるが、常にスイス流の課題をかけた合意形成方式で克服している。勿論、現在も多難な課題に直面している。けれども私は、この管見を通じ：「棲み分け原理」を歴史が洗練した：「民主主義にタイムリミットなし」と

言う、スイスの人たちの『国づくり』の英知を信じ：筆を措く。

* * *
貴重な紙面二年の割愛に深謝。



「森と湖畔の公園」
オープン

川之江市



平成六年四月、川之江市金田町にオープンした「森と湖畔の公園」は三島・川の江インターから車で十分の所にあります。総面積十・二haで七haの池に面し、中央ひろば・菖蒲園・原っぱひろば・四季の森・自然観察の森・オートキャンプ場の六つのゾーンに分かれており、子供からお年寄りまで、四季を通じて自然を満喫できます。

農村の暮らしをどうぞ！
「石畳の宿」オープン

内子町



農村体験
宿泊施設
「石畳の宿」
が八月一日
開業しまし
た。

この施設
は、都市生
活者が農村に宿泊し、滞在するこ
とにより、中山間地域の農村と農
業の振興を図ることを目的に、地
域の人々がこの施設に関わり、経
営に参画することによって交流し、
地域の文化、産業を継承発展させ
ることと活性化を狙いとしていま
す。

この狙いを達
成するために、

公園のシンボルともいえる、「ふれあい橋」は、鶴をイメージした斜張橋で、高知自動車道からも見ることができ、この夏、オートキャンプ場は大変な賑わいで、九m四方のゆったりしたテントサイトが魅力です。一泊二日で二〇〇〇円、炊事棟・身障者用トイレ・シャワー室・その他キャンプ用品の貸し出しもあり、家族グループで、気軽にアウトドアを楽しんでいただけです。

※問い合わせ先
川之江市役所商工観光課
☎0896(58)1111
(内1202)

亀老山展望公園
“自然環境との調和”

吉海町

ふるさとづくり事業の一環として、既存の展望台をリニューアルした「亀老山展望公園」が、三月に竣工しました。

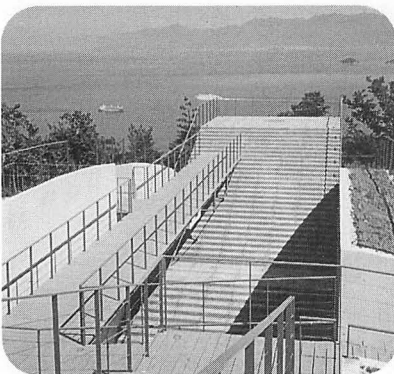
山を見上げても展望台らしき建物が見当たらないのは、いわゆる展望台とは一線を画し、地中に埋没した活者が農村に宿泊し、滞在することにより、中山間地域の農村と農業の振興を図ることを目的に、地域の人々がこの施設に関わり、経営に参画することによって交流し、地域の文化、産業を継承発展させることと活性化を狙いとしています。

したかのようなデザインになっているためです。
東西ふたつの
デッキを、木製回廊式の渡り廊下で散策。西瀬戸大橋架橋現場や石鎚山が一望でき、晴天時には瀬戸大橋も見ることが出来ます。日本三大潮流・来島海峡を往来する船の多さには改めて驚かされます。

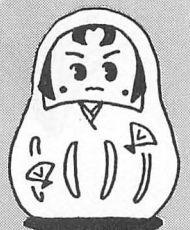
コスモスやハギの咲く頃、そよ風に吹かれながら景色を眺めれば、コンセプトである「自然環境との調和」を実感してもらえることでしょう。

現在、アクセス道の拡幅工事のため、通行できる日が限られておりますので、ご確認の上是非お越し下さい。

※問い合わせ先 吉海町観光協会



☎0897(84)2111





また、公園内には、夏場は冷気が吹き出し、外気との温度差で神秘的な霧が発生する「風穴」もありま



県立自然公園皿ヶ嶺の麓に「上林森林公園」が完成しました。

同公園には、多目的広場や遊歩道、避難小屋、トイレ、給水施設等が整備されています。特に遊歩道の周辺には、もみじ・かえでや高山植物等が群生し、四季折々の装いで目を楽しませてくれるとともに、気軽に森林浴や皿ヶ嶺登山が楽しめます。

緑と自然がいっぱい 「上林森林公園」

重信町

重信町役場企画商工課
☎0899 (64) 2001
(内552)

※問い合わせ先
皆さんも是非一度、緑と自然がいっぱいの中で森林浴を楽しんでみませんか！

素人臭い田舎の宿として試行錯誤しながら営業を始めた次第です。

建物は、築八十年（推定）の農家を解体移築して修理し、宿として整備したもので、なかなか格好の良い建物と自負しています。料理は、地元の女性の手作りによる山菜を中心に提供していますが、宿泊された人の評価も高く安堵します。この冷気、汗ばんだ体には心地よいものです。

岩の隙間から湧き出る水は「水の元の水」と呼ばれ、冷たくておいしく「名水」に匹敵する程です。この水を求めて、週末には多くの方々が訪れています。



ているところですよ。

料金は、大人一人一泊二食で七千五百円（ただし、二人以上利用の場合）です。興味のある向きは、一度お試し下さい。
※予約は、利用の三日以上前に次のところへ
「石畳の宿」

☎0893 (44) 5730

国道三七八号線「夕やけこやけライン」を走っていると、丘の上に見えるモダンな建物・・・それが「潮風ふれあいの館」です。瀬戸内海のパノラマが一望でき、潮風香るとつてもすきな宿泊施設です。もちろん、伊予灘に沈む夕日のビュー・ポイント、もうあなたはリゾート気分・・・！
この宿泊施設は、「ふたみ潮風ふれあい公園」内に位置し、研修に、合宿に、愛護班活動に、またプライ

宿泊施設 「潮風ふれあいの館」 オープン！

双海町

※予約申込先
潮風ふれあいの館
☎0899 (86) 1559
※問い合わせ先
双海町役場企画調整室
☎0899 (86) 1111

ベートにご利用いただけます。食事は、完備された厨房で、自炊をしていただきます。また、希望により地元業者から料理の配達もを行います。

さらに来春には、同公園と日本で初めての夕日のミュージアム等の施設を充実させた「ふたみシーサイド公園」が、海と山の交流の拠点としてグランドオープンいたします。ご期待ください。
『しずむ夕日が立ちどまるまち・・・双海町』へぜひお越しください。





“シルクの町”に 「シルク博物館」

野村町

野村町のエントランスゾーン、朝霧湖畔に、「まゆ」をイメージしたツインドームの「シルク博物館」がオープンしました。

皇室の衣冠束帯、伊勢神宮のご料糸等にも使用されてきた本町のシルク産業を見直すと共に、懐古趣味的に蚕糸業の機械器具を展示するのではなく、動く博物館、美しい展示、ファッション文化の展示をコンセプトにしています。

本町の蚕糸業の歴史と、「阿下歌舞伎」の衣装、娘の嫁入り衣装にと母親が想いをこめて織りあげた着物など、常設ホールは町民

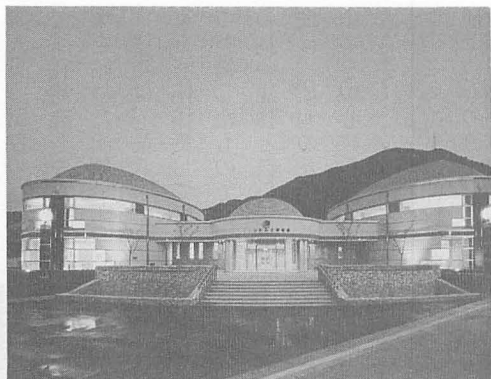
の暮らしに深くかわり、それぞれに物語のある品物を展示しています。

イベントホールは、世界の衣装を展示する一方、ミニコンサート、絵画、写真展など多様な活用を計画しています。

また、併設した「絹織物館」では町内の女性十数名が、本町産の繭から織物づくりに挑戦し、手織りの洋服を作る人もでき、博物館、織物館は町民の暮らしの中に根をおろしはじめています。

※問い合わせ先 シルク博物館

☎ 0894 (72) 3710



内海村の地域づくりの拠点、「DE・あ・い・21」が六月にオープンしました。

一階は、ゆったりとした空間をもつエントランスホール、カフェテリア、児童コーナーなど、憩の場、くつろぎの場となっています。

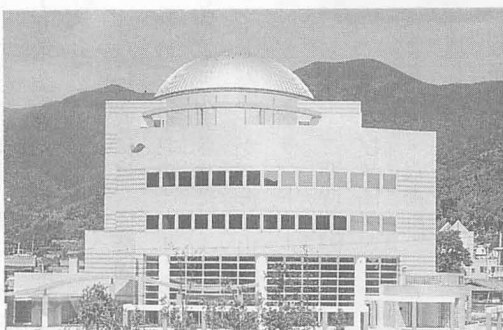
二階は、二十四時間開放のクラブハウスがあり、各種団体、趣味の会、ピアノ塾などが利用しています。三階は商工会、研修室があり、四階は、映画、ビデオの上映会やミニコンサートなど多目的に使えるホールがあります。

DE・あ・い・21は、人と人との出会いを基本とし、その出会いを通じて、お互いがふれあいの中

“新しい出会い”を 「DE・あ・い・21」

内海村

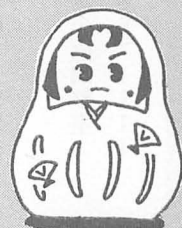
で情報を交わしながら、何か新しいモノを生み出していくことを目指しています。



「DE・あ・い・21に行けば誰かに会える。何かができる」そんな施設にしたいと思っています。あなたも国道五六号線で一番目立つ建物、DE・あ・い・21で新しい出会いを体験してみませんか！

※問い合わせ先 DE・あ・い・21

☎ 0895 (85) 1021



お知らせ

「まちづくり草の根文化講演会」の開催について

今日、日本全国様々なところで、地域の活性化に向けて、各種の文化施設や公園整備あるいはまちづくりイベントの開催など、ハード・ソフト両面から様々な「まちづくり・むらおこし」活動が展開されています。

しかしながら、「まちづくり・むらおこし」活動を取り巻く社会環境には、地域住民のまちづくり意識や地域資源の活用など、多くの問題が山積しています。

そこで、地域に根ざした歴史や生活文化に裏打ちされた、まちづくり活動の原点を探り、地域住民が一体となって進めるまちづくりの展開方策などについて認識を新たにするとともに、個性的で独創的な活力と潤いのあるふるさとづくりに資するため、まちづくり先進地の実践者を招いて『まちづくり草の根文化講演会』を次のとおり開催することとなりました。

つきましては、皆様お誘い合わせの上、奮ってご参加いただきますようご案内いたします。

■テーマ

『“夢” “創造” “未来” 魅力あるふるさとづくりを求めて』

演 題

「地域資源の再生と住民活動」

講師：橋本典明（日本大正村実行委員）

■開催日 平成6年10月18日（火）

■場 所 大洲市役所（2F大ホール）

■主 催 大洲市、(財)愛媛県まちづくり総合センター

■スケジュール

受付開始……15：00

開 会……15：30

講 演……15：40

閉 会……17：40

■参加費 入場無料

地域づくりビデオ（貸出し）のご案内

当センターでは、「地域づくりビデオ」を備え、無料で貸出しをしています。今回下表のビデオが新しくそろいました。ぜひご利用ください。（貸出し期間は原則として2週間までです）

| No | タイトル | 製作者 | 時間(分) |
|-----|--|-----------------|-------|
| 102 | ふるさと再発見～21世紀のふるさと創造～ 快適で個性あふれる地域づくり | 愛媛県 | 30 |
| 103 | えひめ活力の条件 ～新しいまちづくり～ | NHK松山放送局 | 55 |
| 104 | えひめ活力の条件 徹底討論「次代の街づくり」 | NHK松山放送局 | 55 |
| 105 | 全国シニア・シルバーコーラス 発表交流会'93 in松山 | 松山市 | 90 |
| 106 | 豊橋市ビジョンビデオ 新・世・紀・序・説 | 愛知県豊橋市 | 20 |
| 107 | 開田そば 手打ちそばの作り方 | 長野県開田村 | 10 |
| 108 | 「紳助のそれがベストか!？」 ～超地方時代がやってきた～ | (財)日本広報センター | 45 |
| 109 | 「天使よ故郷をふりかえれ」 ～新地方生活主義のススメ～ | (財)日本広報センター | 45 |
| 110 | 究極！村おこし最前線 | テレビ愛媛 | 75 |
| 111 | ふるさと再発見 “均衡のとれたたくましい県土づくり” | 愛媛県 | 30 |
| 112 | 未来を実験する地域づくり “悠木の聖 小国町” ～小さな国から広がる大きな世界～ | 木魂館 (熊本県小国町) | 150 |
| 113 | ふるさと再発見 「幸せで明るい長寿福祉社会づくり」 | 愛媛県 | 30 |
| 114 | 霧の中のアルカディア（桃源郷） ～いにしえからのたより～ | 大洲市 | 30 |

秋桜、野菊に 月見草……。

秋は、こんなに女の子らしい草花が勢揃い。

そのお花たちにならって、私もおしとやかに！という決心も今ではどこへやら。

現実には、「食欲の秋」があるばかり……。

食べ過ぎにはご用心、ご用心。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人のMs。(中路・川原)まで

〒790 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 0899(32)7750

FAX 0899(32)7760

発行/平成六年十月一日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議